

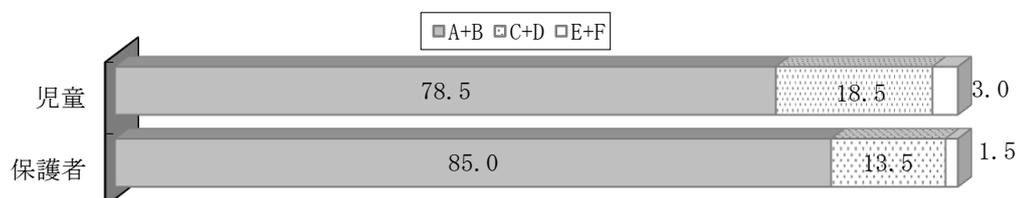
令和3年度 学校教育自己診断 小学校（共通項目）

1. 学校の生活について

児童 学校へ行くのが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くのを楽しみにしている。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

前年度比:児童-0.7%、保護者-1.2%

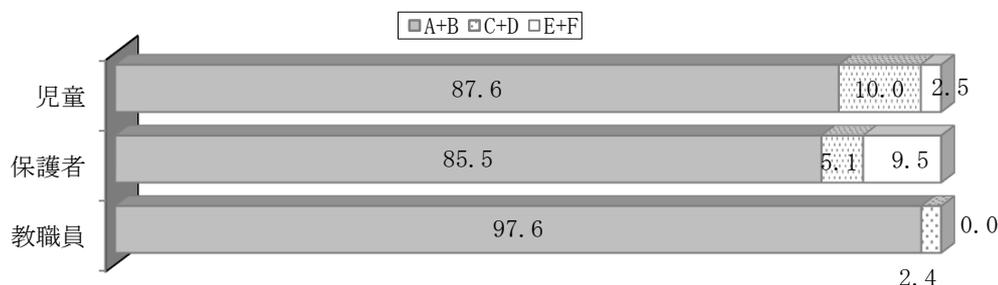
前年度と比較して、児童と保護者とも肯定的な回答は微減したが、80%前後の数値を維持している。これは、コロナ禍においても、各学校での学級力向上の取組が継続できている成果と考えられる。しかし、2割前後の児童・保護者は否定的な回答もある。今後も引き続き、児童一人一人の個性、持ち味を大切に、児童同士が互いの違いを認め合える集団を作り、全ての児童が安心して学べる学級・学校づくりに取り組むとともに、学校と保護者が連携し、児童をより深く理解することが求められる。

2. 「確かな学力」の育成について

児童 授業は、わかりやすい。

保護者 先生は、授業がわかりやすいように工夫しているようだ。

教職員 学校では、常にわかりやすい授業をめざして工夫改善を図っている。



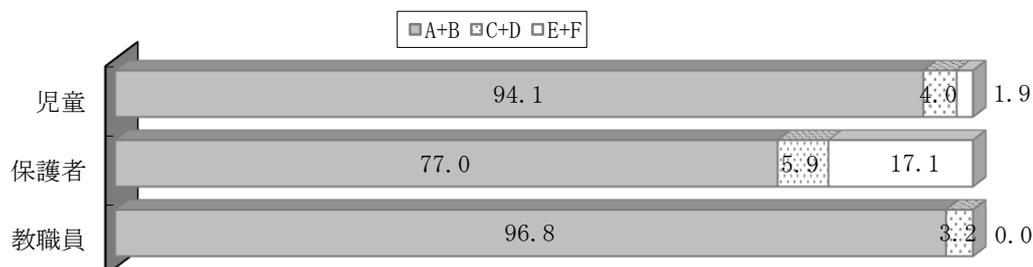
〔分析〕

前年度比:児童-0.5%、保護者+0.6%、教職員+1.3%

児童・保護者・教職員の三者とも肯定的な回答はほぼ横ばいであり、高い数値を保っている。今後も、各学校における校内研究や研修による授業改善を日々実践し、引き続き児童の関心・意欲を高める授業をめざした取組が必要である。また、教職員の肯定的な回答と保護者との回答結果にやや差があることから、今後も「開かれた学校」をめざし、授業のねらいや目的等についても発信していくことが求められる。

3. ICTの活用について

児童 先生は、コンピュータやプロジェクターを使って授業している。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使った授業づくりを推進している。



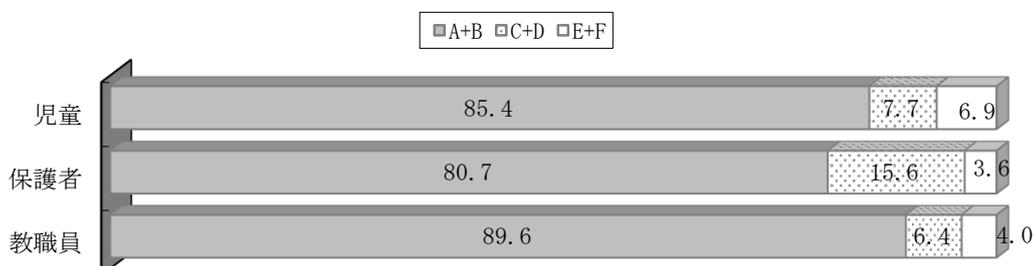
[分析]

前年度比:児童+0.3%、保護者+11.6%、教職員+4.2%

児童・教職員の肯定的回答が90%を超えており高い数値となっている。また、保護者の肯定的な回答も大幅に増加しており、GIGAスクール構想による1人1台端末の活用が推進されてきた成果であると考えられる。しかし、一方で保護者については、児童・教職員と比較すると低い数値である。今後も、ICTを活用し、児童にとって分かりやすい授業づくりの推進が求められる。また、保護者に対して、授業内容や様子等を学校だよりやホームページ等を活用して周知を行う必要がある。

4. 学校の通知表について

児童 通知表の内容は、納得できる。
 保護者 通知表は、よくわかる。
 教職員 学校の通知表は、児童・保護者にわかりやすく、適切な評価が行われている。



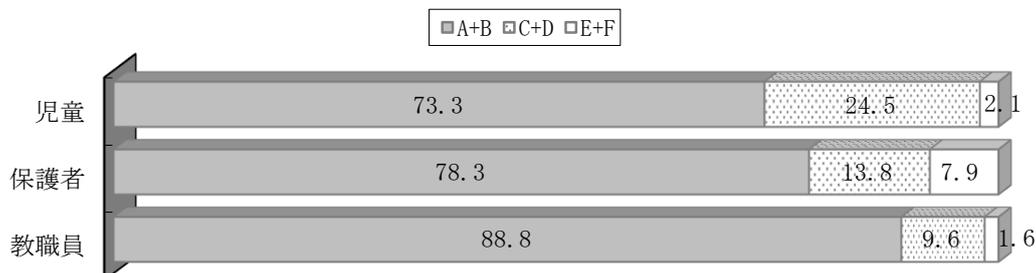
[分析]

前年度比:児童-1.1%、保護者-2.0%、教職員+2.8%

三者ともいずれも高い肯定的回答の割合となっている。これは、教職員が評価を見据えた授業づくりの観点を導入し、日々実践してきた成果と考えられる。通知表の評価を通して、児童自身が学習の成果と課題を見つめ直すきっかけとなるように、また、保護者と学校との信頼関係構築のための手掛かりとして機能していくように、今後も継続して取り組む必要がある。評価の妥当性・信頼性を高められるような準備と発信に努めていく。

5. 家庭学習について

児童 家では、自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、家庭学習の習慣がつくよう取組を行っている。
 教職員 学校では、家庭学習の充実に向けて、家庭と連携するなど、重点的に行っている。



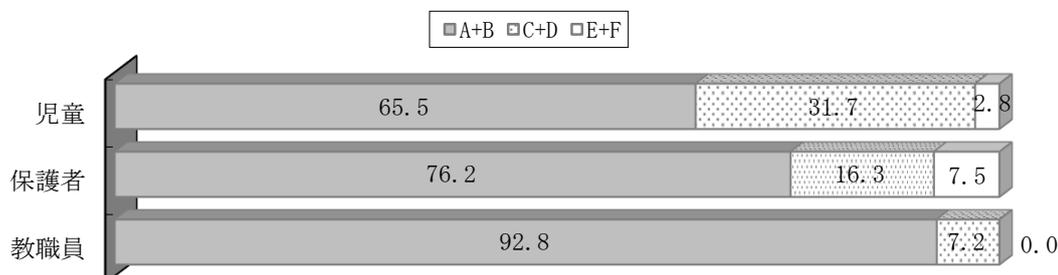
[分析]

前年度比:児童-0.4%、保護者+0.8%、教職員+2.8%

児童の肯定的回答については、各学校における家庭学習に対する児童への説明や出題の方法などの工夫の成果が表れていると考えられるが、80%以上をめざすために、新たな取組や方策が必要である。1人1台端末を有効に活用し、家庭で自らが学習を向かうための方法等、丁寧に指導していくことが求められる。保護者の肯定的回答については、予習に視点を当てた宿題の成果により割合が高くなっていると考えられる。家庭学習を通して、自ら学ぶ力の育成が必要である。

6. 読書習慣について

児童 読書をよくする。(マンガ以外の)
 保護者 学校は、子どもに読書の習慣がつくよう指導してくれている。
 教職員 学校では、子どもの読書習慣の定着に向けた取組を、重点的に行っている。



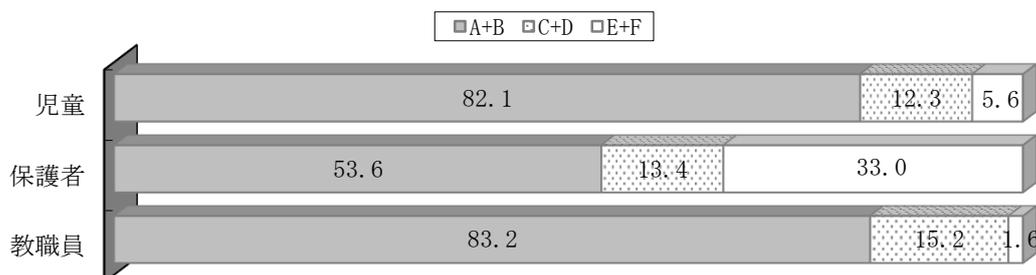
[分析]

前年度比:児童-0.3%、保護者+0.8%、教職員+3.1%

児童の肯定的回答が低い。学校図書館専任職員と授業を行う教職員とが連携し、授業での活用など、読書活動の推進が必要であると考えられる。町立学校全校で読書活動に力を入れていることを、地域や保護者にも積極的に発信していく必要がある。今後も継続して、読書指導につながる授業づくり、家庭読書の推進等の取組を充実させていくことが求められる。

7. キャリア教育について

児童 学校では、自分らしく生きることや、将来について考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、子どもが生き方や将来について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、児童が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



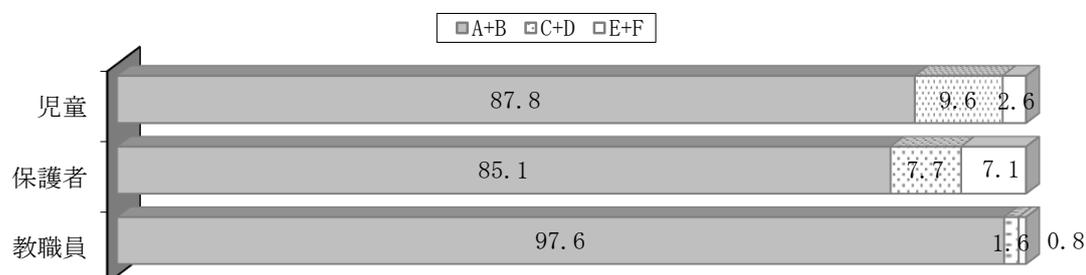
〔分析〕

前年度比:児童+1.6%、保護者+3.2%、教職員+8.2%

児童と教職員の肯定的回答が80%以上であることは、総合学習や道德等、自分らしく生きることについて考える取組の成果が表れていると考えられる。教職員の肯定的回答が大幅に増加しており、各校においてキャリアパスポートを活用した取組への共通理解が進んだことの表れであると考えられる。今後も、キャリア教育に対する意識を児童自身の自己肯定感や自尊感情の醸成に重点を置き、あらゆる教育において展開していくことが求められる。保護者の「わからない」の回答が33%あることについては、キャリアパスポートを活用し、児童が主体的に自己実現に向かって将来を描く力の土台を形成していくことで、保護者への発信につなげていく必要がある。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

児童 学校は、人に対する思いやりやルールの大切さについて教えてくれる。
 保護者 子どもは、人権の大切さや社会のルールについて、わかっていると思う。
 教職員 学校は、人権の大切さや社会のルールについて、身につけるよう指導している。



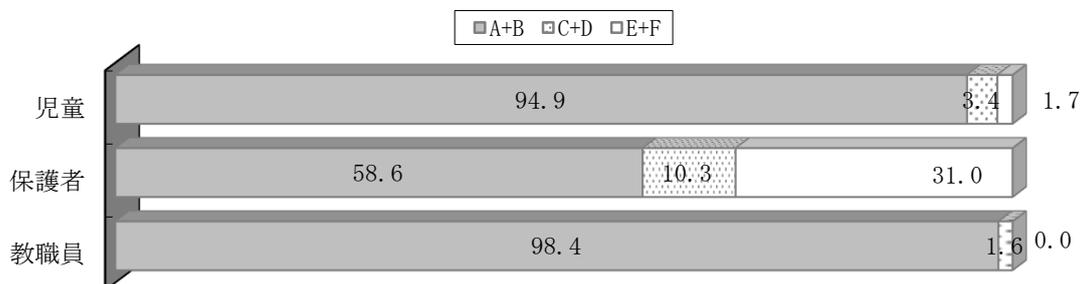
〔分析〕

前年度比:児童+2.2%、保護者+0.4%、教職員-0.9%

三者ともいずれも高い肯定的回答の割合を維持している。これは、日々の小さな努力の積み重ねの成果と考えられる。小学校においては、引き続き、全ての児童が安心して過ごせる学級づくりを柱として、規範意識を醸成すると同時に、特別の教科道德を要として、豊かな人間性を育む授業改善等が求められる。また、学校と保護者が連携し、児童をより深く理解していくことも必要がある。

9. いじめ防止・対応について

児童 学校は、「いじめをしてはいけない」と教えてくれる。
 保護者 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を推進している。
 教職員 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を、組織的に行っている。



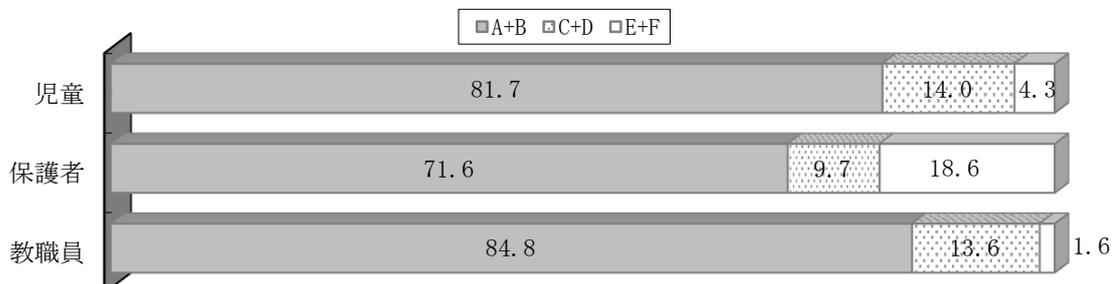
〔分析〕

前年度比：児童＋3.7%、保護者＋3.6%、教職員＋2.1%

昨年度までと同様、児童と教職員の肯定的回答は高い数値を維持しており、三者とも微増という結果であった。いじめを許さない集団作りや、全ての教職員が「いじめは決して許さない」という毅然とした姿勢を示していることが成果として表れている。今後も、いじめの未然防止、早期対応に向けた取組を、より一層充実させることが求められる。保護者については、肯定的回答が増加したものの、「わからない」の回答が依然として多く、大きな課題である。「いじめ対応リーフレット」等を有効に活用しながら、学校がいじめに対する取組を積極的に発信し、保護者の理解につなげていかなければならない。

10. 「食の教育」について

児童 学校では、「食」の大切さについて、考える機会がある。
 保護者 学校では、「食育」についての取組を推進している。
 教職員 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。



〔分析〕

前年度比：児童＋2.9%、保護者＋4.3%、教職員＋6.9%

三者とも肯定的な回答が増加した。学校給食や家庭科及び社会科の時間を中心に、「食」の大切さや「命」の大切さ、そして、地産地消の重要性などについて学ぶ機会を充実させてきた成果を考えられる。今後も、保護者に対しては献立等を通して学校における「食育」を発信し、教職員に対しても給食の時間を教育の場と捉えるよう促すことが求められる。

※昨年度まで質問事項としてあった「保護者や地域との連携について」は、今年度新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で学校行事などを中止したため、質問項目から削除しております。